HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語と中国語の対照から見たアイヌ語の時間表現 : 中国語の「過」とアイヌ語の「a」を中心として [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	馬, 長城
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15069号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/85479
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Changcheng_Ma_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　馬　長　城

学位論文題名

日本語と中国語の対照から見たアイヌ語の時間表現

―中国語の「過」とアイヌ語の「a」を中心として―

・本論文の観点と方法

本論文は、先行研究において、いまだ十分な説明を与えられているとは言えない、アイヌ語の助動詞「a」の機能を考察の中心とするものである。先行研究においては、「a」が単一の文の中で果たす役割に主として注意が向けられていた。しかし、本論文では、「a」の機能を考察するに際して、「a」が含まれている文だけではなく、前後の文にまで考察の対象を広げ、複数の文が構成する「テキスト」レベルでの分析を意図している点に観点の新しさが認められる。また、その際、アイヌ語と同じく、テンス（時制）を持たないとされる中国語において、「過」という形式が機能的類似点を持つことに着目して、中国語との対照という観点からも「a」の機能を再考している点に特色がある。方法としては、アイヌ語に関しては、信頼できる大量のアイヌ語資料が利用できる沙流・千歳方言のデータに依拠して、実証的に先行研究を検証する、という点では従来のアイヌ語研究における記述的方法論に忠実に従っていると言えるが、それに加えて、諸言語のアスペクトに関する近年の類型論的研究、及び対照言語学的研究の知見を十分に活用しながら、先行研究では未解決であった「a」の諸性質を明らかにしている。

・本論文の内容

第1章では、研究の背景と目的を主として述べる。また、使用した言語データ、標記のような、内容の理解に必要な情報について解説する。

第2章では、「a」、「過」に関する先行研究を整理し、未解決の問題点を明らかにしている。

第3章で文レベルにおけるアイヌ語の「a」と中国語の「過」の表す意味について考察する。先行研究では、「a」の機能に関して Perfective とするか Perfect とするかの議論が中心的な問題の一つであったが、資料によって再検証した結果、「a」の基本的な性質として Perfect を仮定すべきことを述べる。また、中国語の「過」は継続形式「着」と共起しないのに対して、アイヌ語の「a」は動作継続を表わす「kor an」や結果継続を表わす「wa an」と共起できる。また、その場合も「a」はやはり Perfect と関係付けられることを述べる。なお、「kor an a」は主体動作動詞と共起すると、完結を問題とせず、「最近の活動」という意味が顕在化すること、これに対して、「wa an a」が主体変化動詞と共起すると、「今でも鮮明に存続している」という意味が顕在化することを指摘している。

第4章では、平叙文と疑問文におけるアイヌ語の助動詞「a」と中国語のアスペクト助詞「過」の文法的性質を考察している。中国語の「過」には出来事の完結性を表わす「過$_1$」と「経験」を表わす「過$_2$」の2つの用法があるが、アイヌ語の「a」と中国語の「過$_1$」が、単独で平叙文の文末に立たない、もしくは立ちにくいのは、いずれも「継起性」を表わすためである可能性を指摘する。すなわち、中国語の「過$_1$」もアイヌ語の「a」も「継起性」に基

づく「次の出来事を要求する」という性質を基本とするが、継起を表示する機能を持つ形式である「a」、「過₁」は、それら自体では文を終結させることが困難である。これにより、文を後続させるにしろ、そこで文を終結させるにしろ、「継起する別の出来事の存在」を明示する言語形式と呼応することが必要である、という共通性を示すことを明らかにしている。なお、「経験」を表す「過₂」の場合は、文末助詞「了」が不要だが、継起性の「過₁」の場合は「了」が必要となることから、「了」という形式の使用により、「過」の「継起」という特徴が大きな変化を受けることを指摘し、中国語の「過」はこの点でアイヌ語の「a」とは大きく異なる点があることを述べている。他方、アイヌ語の「a」は諾否疑問文の文末に立つことができる。その理由は疑問のイントネーションによって文の終結が明示されることによる。これに対し、中国語の「過₁」はアイヌ語の「a」と異なり、諾否疑問文の文末には立たない。ただし、「了」を伴えば疑問文にすることができる。この点では両言語の形式は必ずしも平行的な性質を示さないことを指摘している。なお、今後の課題であるが「a」は諾否疑問文の末尾に用いられた例はあるが、疑問詞疑問文の末尾に用いられている例はこれまでのところ見当たらず、この点も「a」の性質の解明に関係する可能性を指摘している。

第 5章では、テキストレベルにおけるアイヌ語の「a」と中国語の「過」の機能を具体的に考察する。アイヌ語の「a」については、テキストレベルの観点からは、「a」は、従属節に現れても、連体修飾節に現れても、同じく継起性というタクシス機能を表わすことを実証的に論じている。さらに、従属節と連体修飾節における「a」は、未来を表わす助動詞「kusu ne」や継続の形式「wa an」、「kor an」も共起することがあるので、これらの現象についても考察を行っている。その結果、「kusu ne a」、「wa an a」、「kor an a」のような継続の意味を含む形式においても「a」による継起の機能が依然として有効であることを実証的に示している。他方、中国語の「過」についても先行研究に依拠しながら、「継起性」という基本機能をもとに、出来事が継起的に起こることを明示しつつ、文を緊密なテキストへと構成するタクシス機能を持つことを示し、この点でアイヌ語の「a」と共通する特徴を持つことを述べている。

第 6章では、全体のまとめと結論が述べられている。